

マイケル・B・A・オールドストーン著、二宮陸雄訳

『ウイルスの脅威——人類の長い戦い』

これまで感染症に関する多くの歴史書乃至解説書が出されて来たが、細菌感染症、ウイルス感染症を区別することなく記載されてきた。ウイルスが細菌と異なる微生物であることが明らかにされたのは一九世紀末であるが、ウイルス感染症とその対策は細菌感染症とは本質的に異なるものであり、最近になってウイルス感染症史として別個に取り組まれるに至った。例えば一九七八年に英国で出版されたウォーターソン、ウイルキンソン共著の「見えざる病原体を追って」の訳本(吉岡書店、一九八七)、一九九四年に米国で出版されたピーター・ラデッキー著「ウイルスの追跡者たち」の訳本(青土社、一九九七)などであるが、本書はそれらに続いてウイルス感染症史とともにウイルス感染症の現状とウイルス学の最新情報をも一般に伝えるもの(原著は一九九八年)になっている。

ウイルス感染症史の黎明期の舞台は英国、フランスなど専らヨーロッパであった。二〇世紀初頭、米国のリードとキヤロルが黄熱の病原体が細菌濾過器を通過することを見出したのが、最初の人の病原ウイルスの報告となったが、それ以降二〇世紀は米国が世界におけるウイルス学の主流を占めるに至った。著者のオールドストーンはその後半の半世紀を米国のウイルス研究者として現在に至るまで活躍を続けている一人であり、ウイルス感染症との戦いはその間の自らの体験は

もとより、身近な人脈を通じた情報に基づいたものでもある。それだけに米国のウイルス研究者とその研究成果をやや強調するものにはなっているが、具体的な多くのエピソードが述べられている。その中には研究者の間の研究成果を巡る微妙な人間関係や黄熱の病原体が蚊の媒介によることを自らの人体実験で立証して黄熱死する劇的なエピソードなど、極めて迫力のあるものになっている。

本書の前半は、天然痘、黄熱、麻疹、ポリオの四疾患に焦点をあて、人類の歴史を変える程の惨禍とワクチン開発による対策の成功物語が述べられ、後半はプリオン(ウイルスとは異なる新たな病原体)とともにいくつかの新興ウイルス(新たに見出されたウイルスのことで、ここではラッサ熱ウイルス、ハンタウイルス、エボラウイルスなど出血熱をもたらすウイルスとエイズの病原ウイルスであるヒト免疫不全ウイルスが取り上げられている)や再興ウイルスとしてのインフルエンザウイルスとの戦いの現状を伝え、更に未来への視点として持続感染をもたらすウイルスにまで言及している。即ちウイルス感染症とその対策に関する過去、現在、未来について平易な表現を用いて現代ウイルス学に基づく学術的な解説書ともなっている。特に医学生とともに医療関係者に一読を勧めたい。又ウイルスの専門家の教養書としても有用なものである。特に本書には、ウイルスと免疫に関する可成高度な解説文が付記されており、本書のより深い理解はもとより、ウイルス感染症とその対策の独自性を理解する上にも有用な項目となっている。

なお邦訳されたウイルス学、免疫学などの学術用語は可成専門的なものであるが、正確な用語となっている。

著者は最後にウイルス感染症とその対応が人類の歴史に大きな影響をもたらしたことを述べ、続いて「人類の輝ける歴史は、戦争に勝ったことでもなく、王朝ができたことでもなく、また財閥帝国が築かれたことでもなく、人類の生活状況の向上にある。われわれの健康を侵すさまざまな病気を根絶することが文明の成功の王道であって、この責務を遂行する人びとこそ勇氣ある新しい世界への眞の航海者となろう。」と結んでいる。

この優れた著書を邦訳された二宮陸雄先生は、これまで多数の著書訳書を出しておられるが、最近では人類に最大の惨禍をもたらした天然痘に対する予防ワクチンである種痘法の普及に盡瘁したわが国における先覚的蘭方医(北条諒齋、桑田立齋ら)を紹介する著書(天然痘に挑む)平河出版社一九九七、「桑田立齋先生」桑田立齋先生顕彰会一九九八を著しておられる。二宮先生がこの著書の訳に取り組まれたのもオールドストーンが最後に述べているように天然痘が根絶され、いくつかのウイルス感染症も制御されつつあるが、その根絶や制御に向けて盡瘁した多くの先人のように、新たな人類の脅威となつてきているエイズなど多様な新興ウイルス感染症の制御に関心を抱き眞摯に取り組む研究者であることを期待してのことであろう。

(加藤 四郎)

(岩波書店、東京都千代田区一ツ橋二一五―一五、電話〇三―一五二一

〇―四〇〇〇、発行一九九九年二月一六日、B5判、本文二七八頁、定価二、八〇〇円)

中村 桂子 著

### 『北里柴三郎』

本書には副題「破傷風菌論」があり、扉を開くと書名の上に「能動知性」1「生の場」とも付してあり、著者には「北里柴三郎・中村桂子」とある。哲学書房の意欲的な企画で始まる叢書第一期十巻の第一巻として昨年十二月に発刊されたものであり、この約百年間の日本の知性として次は呉秀三、その後寺田寅彦、西田幾多郎、夏目漱石、福沢諭吉等が予定されているとの事である。

中村氏は著名な生命科学者で、生命誌研究館副館長として著作その他種々活躍しておられる事は周知の事である。

先ず本書の特徴をあげる。

一 北里柴三郎(以下「北里」)についての評伝などは出版されているが、北里学派とも言うべき北里関係の医師以外の自然科学者の執筆は最初であり、評伝の他に微生物学の発展や日本の科学と社会との関係など種々提言も述べている。

二 続いて「北里」の「破傷風菌論」としてドイツでの業績など主な日本での演説などの全文の他欧文も含め発表論文、著書、文献などが詳細に紹介されており、続いて順天堂大学医学部医史学研究室の月澤美代子氏による解説がある。